イギリス浪漫主義とエミリー・ブロンテ
第 二 報

堀 出 稔

English Romanticism and Emily Brontë
Part II

Minoru HORIDE

『イギリス浪漫主義とエミリー・ブロンテ』第一報において，イギリス18世紀後半に生じたロマン主義運動がフランス革命の影響と相前後し，すでにイギリスにおいても萌芽していた事実を確認した。特にロマン派の作家達の中からワーズワースに焦点を絞り，いわゆる彼自身の詩的想像からロマン主義の思想の一要素を明らかにしようとした．この第二報においては1848年，30才の若さで世を去ったエミリー・ブロンテの生涯と作品にどのようにロマン派の影響が深まり，その後エミリー独自の世界観を見い出していったかを考察してみたい．分析の順は，第1課題としてエミリーの幼年期から青年期にかけてのロマン主義の影響，第2課題はバイロン，ワーズワースとエミリーの詩的想像の共通点と相違点，第3課題としてエミリー独自の世界観の創造である．そして第1課題から第3課題を通して結論を導きたい．

第1課題はロマン主義の影響であるが，特に子供時代の読書など伝記的事実を分析していく．エミリーの父パトリック・ブロンテは，厳格な信仰を旨とするプロテスタントの一宗派メソディストの牧師であった．エミリーはこのような父から家庭教育を受けてきた．父パトリックは家庭教育をするにあたって，幼い頃から子供達に読書を励行させた．

> Up and down the house were to be found many standard works of a solid kind, Sir Walter Scott's writtings, Wordsworth's and Southey's poems were among the lighter literature; ...[1)]

父の書斎，子供部屋その他家中に書籍があった．中でも当時活躍中のロマン派の小説や詩も多く含まれていたようである．ギャスケル夫人はブロンテ家の子供達の読書について“children books”がほとんどなかったと言っているように，彼らはあまり子供向きの童話やおとぎ話は読まなかったようである．子供達が好んで読んだ書物は，ウオルター・スコットやバイロンのロマンティックな物語や詩であった．エミリーにおいても同様バイロンの影響が10代から20代にかけて創作した *Gondal Poems* には強く出ている．さらにアン・ラドクリフ夫人の恐怖小説 *The Mysteries of Udolpho* や *The Italian* などの描写やドイツロマン主義のホフマンの影響を指摘する場合もある．また父は子供達に新聞を読んで聞かせる習慣があった．そのため子供達の遊びには，当時新聞で注目を浴びた世の中で活躍している人物を選ぶのであった．子供達が一応読み書きができるようになったと判断した父は，12個の木製の兵隊のおもちゃを与えた．そのおもちゃがその後多くの空想を育み，ブロンテ家の子供達が作家となっていく一要因となっていく．エミリーが8才の頃の空想物語に *Islanders* という作品がある．

> We then chose who should be chief men in our islands.
> Branwell chose John Bull, Astley Cooper, Leigh Hunt;

Emily, Walter Scott, Mr. Lockhert, Johny Lockhert;
Ann, Michael Sasler, Lord Bentinch, Sir Henry Halford.
I chose the Duke of Wellington and two sons, Christopher
North and Co. and Mr. Abernethy.[3)]

それぞれの子供達が自分の島に住む人物を選んだ．姉のシャーロットがウェリントン公爵を選んだのに対して，エミリーはスコットを選んでいる．このような遊びは，エミリー8才の頃から20代まで続いていった．それらの空想物語は，*Young Man*（1826），*Our Fellows*（1827），*Islanders*（1827）であり，そして最もロマン派の影響を受けていると言われる17才頃から始まる *Gondal Poems* へと移っていく．彼らはこのような空想物語を書き続けるうちに，少しずつ創作に対して自信を持ち始めた．エミリー17才以後，詩，物語を盛んに書き続けた．その結果兄ブランウェルと姉シャーロットはロマン派の作家達に彼らの作品を見てもらい批評を受ける依頼をするのであった．

He wrote and sent poems to Wordsworth and Coleridge, who both expressed kind and laudatory opinions, and he frequently contributed verses to the 'Leeds Mercury.'[4)]

ブランウェルは絵画が得意であった．事実家族の者達は彼がその能力を伸していくことを信じていた．ロンドンの美術学校に入る計画を立て，一度は出掛けて行ったのであるが，身を持ち崩してしまった．その後ハワースに帰り，家庭教師として時には外の世界に出ていくがすぐ戻って来ては酒に溺れる生活をしていた．彼はワーズワースやコールリッヂに詩作品を送り批評を求めたりしていた．またリードマーキュリー誌やブラックウッド誌に作品を送るが一度も取り上げてもらうということはなかった．シャーロットも当時桂冠詩人であったロバート・サウジに作品の批評を受けたりしている．エミリーは兄や姉達のように当時活躍していたロマン派の作家達に直接手紙を出し，作品の批評を依頼したという事実はなかった．にもかかわらず彼女の作品には時々スコット，バイロン，ワーズワースの影響を思わせる部分がある．それは、エミリーに対するロマン派の影響が子供時代から，読書や話題から知らず知らずのうちに深められていったのではないだろうか．

ロマン主義の特質が昔からの束縛を脱し，熱烈な情念の解放にあったと言う．ワーズワースのように自然に没入し，その崇高さに触れ，詩的想像力によって霊的世界に精神が高められて，"glory"[5)]を感じるといった肯定的な面をロマン主義は持っている．しかしその一方，否定的な面として，人間の心を恐怖で震撼させる悲劇の領域もある．即ち，人間の情念の解放が自由奔放を通り過ぎ，しかもその情念が否定的な面に向けられた時である．ウイリアム・クーパーが恐れたように，想像力が"self-indulgent"な状態となり，"passionate slave"に陥ってしまうのである．そのような感情を騒き立てるのがバイロンの詩の一要素である．当時ヨーロッパ大陸においては彼の詩は多いに高く評価されていた．一方イギリス本国における評価は異なっている．彼の詩は叙事詩に輝くロマン的美しさにもかかわらず，思考の不完全性が指摘された。彼の詩は英雄的感情にまかせて，人間の興奮した感情に訴える．しかもその根庭には"vanity"が潜んでいると言う．彼の詩の評価ばかりでなく実生活の放蕩無頼ぶりによって，イギリス社交界から追放されてしまうのである．ただ彼の偉大さの一つは，スコットの物語詩に奔放さと神秘性を加えた．このようなバイロンの文学がエミリーの作品にどのように影響を与えているのであろうか．その影響は作品全体というわけではないが，時々バイロニックな描写が見られるように思える．

I flung myself upon the stone,
I howled and tore my tangled hair,
and then, when the first gush had flown,
Lay in unspeakable despair.[6)]

この詩は*Gondal Poems*の一部である．"I"は明らかに"passionate slave"の状態に陥っている．また*Wuthering Heights*に描写されるヒースクリッフの時々見せる姿，彼が嵐ケ丘を去っていく時の自然の怒りを表現するような雷と嵐の描写，さらにヒースクリッフが再び嵐ケ丘に戻って来る場面は，まさにバイロニックである．ヒースクリッフが嵐ケ丘に戻って来る場面，秋の日の夕暮時，ネリーの持つリンゴのイメージと重なりあって，彼はまるでエデンの園のイブへのサタンの呼びかけを思い起させる．アーンショウ家とリントン家の人々への容赦のない復讐，キャサリンの死を悲しむ姿など，激しい情念の塊のような人物として描かれる．エミリーがバイロンから影響を受けたとすれば，詩の文体や叙事詩的格調及びディオニソス的要素ではなかっただろうか．デレック・スタンフォードはバイロンのエミリーの詩への影響を彼ら二人の詩を掲げて説明している．

(1) Like the leaves of the forest when Summer is green,
That host with their banners at sunset were seen:
Like the leaves of the forest when Autum hath blown,
That host on the morrow lay withered and strown.

(2) King Julius left the south country
His banners all bravely flying;
His followers went out with Jubilee
But they shall return with sighing.[7)]

(1)はバイロンの詩であり，(2)がエミリーの詩である．二つの詩に共通することは，前半の詩行において戦場に出掛ける兵士達の勇ましい，むしろ狂気に近い歓喜が窺える．だが後半の詩行において戦いに敗れた悲しさが，前半の詩行との極端な対照をなしている．バイロンの詩においては"green"で表現された夏の生々とした描写が"withered"し，"strown"になってしまう．一方エミリーの詩においても前半の"Jubilee"で表現された兵士達の描写が，後半は一変して"sighing"となってしまう．このように"high-pithed"に描写される詩行をバイロンは好んで用いる．バイロンのエミリーの作品への影響は，前に述べたように文体や人物像など部分的であると言える．なぜならバイロンとエミリーのその後の作品に現われた思想は，全く懸け離れているからである．後期のバイロンの作品には，ドン・ジュアンという人物像を通して社会に対する風刺が見られるようになる．一方エミリーは，彼女独自の世界観を築いていく．

ではワーズワースのエミリーの作品に及ぼしている影響とは，どのようであろう．この問題点を明らかにするため，第1課題においてエミリーの伝記的事実を分析していった．だがブロンテ家の蔵書にワーズワースの作品があったとか，兄ブランウェルがワーズワースに作品を批評してもらうために手紙を出したといった間接的影響に留まるだけである．にもかかわらず，二人の作品を対照させると，多くの共通点が見い出せる．バイロンの影響がエミリーの初期の作品に多く見い出せるのに対して，ワーズワースの影響は後期の作品に多い．ワーズワースとエミリーの作品の傾向も後期になるにしたがい相違が出て来るのである．二人の共通性とは次のようである．青年期のワーズワースにとってフランス革命の自由，平等，博愛は感動的であっ

た．彼はオックスフォード大学在学中と卒業後と二度ヨーロッパ大陸に旅に出て，フランス革命後の息吹に触れた．２度目の旅行では偶然アネット・バロンという女性に恋に陥り，女児が生れた．その後のフランス革命の成り行きは，最初の精神を忘れた恐怖政治に変貌していく．それと同時にフランスとイギリスは戦争状態に入る．彼は妻と子供を残して帰国することになる．その後彼は妹のドロシー・ワーズワースに助けられながら創作を続ける．しかし彼はフランスに妻子を残してきた寂しさと，革命後のフランスの状態に失望し，絶望的な気持になっていた．彼が自然に没入していく動機には，これらの事柄が大きく影響を及ぼしていたのではなかろうか．一方エミリーはどうであっただろう．彼女にはワーズワースのように激動する時代の流れを直接体験することはあまりなかったのだが，やはり自然に没入する姿にはワーズワースとの共通性がある．

First melted off the hope of youth,
Then fancy's rainbow fast withdrew;
And the experience told me truth
In mortal bosoms never grew.
'T was grief enough to think mankind
All hollow, servile, insincere;
But worse to trust to my own mind
And find the same corruption there.[8)]

エミリーは18才となり，ローヒル校教師として教壇に立ったが，６ケ月でホームシックと孤独に苛まれハワースに戻って来る．その頃に書かれた詩である。外の世界をあまり知らない彼女は，ホームシックによる悲しさもあってか，かなり激しく人間に対する虚無感を訴えている．そして他の人に対する虚無的な意識が自分の心の中にもあることを見い出し，不信の念に陥る．この事があって以来エミリーは，ベルギーのブリュッセルにあるエジェ寄宿学校にシャーロットと行った以外，晩年までほとんどハワースで過ごすことになる　彼女は日常の家事を喜んで引受け，自由時間には読書をしたり，周辺の荒野を散歩したと言われている．この頃の創作は，妹アンと共に書き続けた *Gondal Poems* とそれに属さないと思われる個人的感情を訴えた詩である．*Gondal Poems* は19代になっても続くが，18才以後のどの詩にも思想の深さが増し，それが晩年の頃の人生観に受け継がれていく．

自然に没入していくワーズワースにもエミリーにも，一種の絶望的な気持が存在していたことは確かであろう．では自然を両者はどのように受けとめていたであろうか．

My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky:
So was it when my life began;
So is it now I am a man;
So be it when I shall grow old,
Or let me die!
The Child is Father of the Man;
And I could wish my days to be
Bound each to each by natural piety.[9)]

この詩はワーズワースの *The Rainbow* と言う詩である．虹を見て感動し，その感動を与えてくれる自然の永遠性を讃え，限りある人生の日々が生れながらの敬虔な気持を持ちながら続

いていくことを願うのである．エミリーにも自然を讃える詩が見られる．

Bluebell, even as all divine
I have seen my darling shine—
Bluebell, even as wan and frail
I have seen my darling fail—
Thou hast found a voice for me,
And soothing words are breathed by thee.

Thus they murmur, "Summer's sun
Warms me till my life is done.
Would I rather choose to die
Under winter's ruthless sky?

"Glad I bloom and calm I fade;
Weeping twilight dews my bed;
Mourner, mourner, dry thy tears—
Sorrow comes with lengthened years!"[10)]

ブルーベルの花を通して自然の抱擁力の偉大さに打たれ，心の弱さを力づけられる．ワーズワースが詩集及び*Lyrical Ballads*によって訴えたように，自然に没入し，自然を通して，その背後にある神秘的な世界を感じる．ワーズワースにとっては，自然はいつも喜びに満ちあふれ美しいばかりではない．時には恐怖と畏敬の念を引き起すのである．常に喜びにあふれた霊的世界を感じとれるのは，純粋な子供の心であり，前世の栄光を感じとれる存在なのである．すでに経験の世界に達している彼にとっては，再びその失われた世界を取り戻そうと自然に没入し，子供時代の記憶を忠実にたどっていこうとする．即ち，自然を観察し，模倣し，描写することが重要となる．彼が栄光の世界に達するには，感覚を離れた想像力が必要になって来る．その想像力と栄光に達しようとする気持が，彼の創作の根源にあったように思われる．彼は栄光という崇高な世界に飛翔させてくれる自然への畏敬の念を終生持ち続けるのである．しかしエミリーとは異なってワーズワースは，後に正統なキリスト教の信仰へと移っていくという大きな思想的変化を示している．

さてエミリーの自然への考えはどうであっただろうか。彼女の思想にも，プラトンの想起説を思わせる詩がある．しかし彼女の思想は晩年に至るまで多岐に及んでいる。1841年３月の彼女の詩の第２，第３スタンザ．

And if I pray, the only prayer
That moves my lips for me
Is—"Leave the heart that now I bear
And give me liberty."
Yes, as my swift days near their goal
'Tis all that I implore—
Through life and death, a chainless soul
With courage to endure![11)]

この詩は The Old Stoic という題で知られる．第1スタンザでは現世の煩悩からの離脱が述べられ，第2スタンザでは祈りの唯一の願いは，現世に耐え忍んで生きている自分の心を離れ，自由でありたいと願う．さらに第3スタンザでは，生と死を通して恐れることのない魂を求める。"chainless soul" という言葉で暗示されるように，何ものにも束縛されることのない魂の存在を願うのである。彼女の祈りは現世の宗教による救済を求めるというより，彼女が自然に没入し，想像の世界に現われる全知全能の神への祈りのように見える．

If thou hast sinned in this world of care,
'T was but the dust of thy drear bode—
They soul was pure when it entered here,
And pure it will go again to God.

We would not leave our native home
For any world beyond the Tomb.
No—rather on thy kindly breast
Let us be laid in lasting rest;
Or waken but to share with thee
A mutual immortality.[12)]

この詩は，1838年5月に書かれた*A. G. A. to A. S.*と題のついた *Gondal Poems* の一つである．この詩に関してデレック・スタンフォードは，プロテスタントの強調する原罪を拒否し，二元論の立場をとっていると言う．エミリーのこのような考えは，彼女の家庭の宗派，メソディスト派の教義とは遠くかけはなれている．むしろワーズワースの詩，*Intimation of Immortality from Recollection of Early Childhood* に書れた考えに近いようである．彼女は18才の時書いた詩の中で，人の罪深さと自分自身の心にもそれを発見した悲しさを詩った．だが彼女は人間の罪深さを責めるのではなく，この大地と人間に限りない愛着を懐くのである．

We would not leave our native home
For any world beyond the Tomb.
No—rather on thy kindly breast
Let us be laid in lasting rest;
Or waken but to share with thee
A mutual immortality.[13)]

この詩行は*I see around me tombstones grey* で始まる詩の抜粋である．"Time and Death and Mortal Pain"[14)] の地上の人間にとって回帰すべき場所は，やはり "our naitive home" であり，死によって人間は地上に "lasting rest" を求めるか，あるいは地上と相互不滅を共にすることを願うのである．このようにしてエミリーは，彼女が逝く2年前に書かれた詩に表現された彼女独自の世界観に到達するのである．

No coward soul is mine
No trembler in the world's storm-troubled sphere
I see Heaven's glorious shine
And Faith shines equal arming me from Fear

O God within my breast
Almighty ever-present Deity
Life, that in me hast rest
As I Undying Life, have power in Thee[15)]

1846年1月に書れた詩の第1，第2スタンザである．第1スタンザでは "the world's storm" で表現された現世での苦悩におびえる存在でなくなった確固とした魂を見い出す．そして第2スタンザにおいて "god within my breast" と表現された神，胸の内なる神に安息と力を得ると言う．彼女はこの詩のどのスタンザにも "god within my breast" が何かとは具体的に述べないが，万物が流転しようともその存在は変わることのないことを述べている．彼女は人間のの罪深さを認めるが，魂の純粋性を信じ，地上と人間に愛着を感じる．原罪という言葉によって現世で言われる神の存在が，人間の罪深さのために絶対の隔りを感じる．それ故に人間は地上の存在であることを受容し，地上と永遠の相互不滅を誓い，人間存在の必然性を "Almighty ever present Deity" と呼ばれる彼女の霊感がとらえた "God within my breast" という神の存在に委ねようとするのではないだろうか．

これまで第1課題においては，イギリスロマン主義がエミリーの幼年期から青年期にかけて間接的に影響を及ぼしていることを述べた．第2課題ではその影響を考えるため，バイロン，ワーズワースと対照しながら論じた．第3課題ではエミリー独自の世界観を考えた．エミリーの一生はイギリスロマン主義の発展とほぼ同時代にあたり，その思想はエミリーの思想形成に深い影響を与えていたと言える．

Reference Books

1) Brontë, Emily: *The Complete Poems of Emily Jane Brontë,* Columbia University Press, (1941)
2) Gaskell, E.C.: *The Life of Charlotte Brontë,* Smith, Elder & Co. (1900)
3) Spark, Muriel and Stanford, Derek: *Emily Bronte,* Peter Owen Limited
4) Quiller-Couch, Arthur: *The Oxford Book of English Verse,* Oxford University Press, (1979)

Notes

1) *The Life of Charlotte Bronte,* 124
2) *Ibid.,* 56
3) *Ibid.,* 85
4) *Ibid.,* 185
5) Wordworth の *Intimation of Immortality from Recollection of Early Childhood* と題する詩の言葉.
6) *Emily Bronte,* 140
7) *Ibid.,* 141
8) *The Complete Poems of Emily Jane Bronte,* 36
9) *The Oxford Book of English Verse,* 624
10) *The Complete Poems of Emily Jane Bronte,* 107
11) *Ibid.,* 163
12) *Ibid.,* 71
13) *Ibid.,* 167
14) Emily Brontë の *I see around me tombstones grey* で始まる詩の前半に出る言葉.
15) *The Complete Poems of Emily Jane Bronte,* 243